

専ら精細詳密を旨とし徒らに大なる巻帙を成してその實何人にも讀まれざる史料集成に墮し去つてゐるのを見るとき、却つてかくの如き小冊子の實地に有つ意味の重大さを思はざるを得ない。筆者はこの「綱要」が全八幡町民をして眞に町史編纂の意義を自覺せしめ、その困難なる事業の完成の爲に一致協力するに至らんことを期待するものである。(菊判附録年表共 一一八頁、圖版五葉、地圖二葉附、八幡町役場發行、非賣)

○軍事史研究の創刊

今回陸海軍將校の有志の間に新に軍事史學會なるものが設けられて、年六回雜誌「軍事史研究」が發行せられることになつたに就つて、廣く一般史學研究者の賛同助成が求められてゐる。その趣旨とするところは、軍事史の部門に立つて建國の本義を明らかにし以て史學本來の使命を達せんとするにあるといふ。もとより特に軍事史なる一部門の薪に一般歴史研究の中に設けられようべきものとは考へられないが、平素事に軍に従ふ人々が、その關心するところを通じて歴史の研究に進み入ることはそれ自身好ましいことであり、その趣旨の眞に達成せらるゝことは誠に賀すべきことではなければならぬ。筆者はその同人達が歴史研究に於てはまづ偏見を去り先入主たるものを取除くことが第一義なることを終始忘れず、一般歴史家達も亦進んで之に協力し眞に歴史的なるもの、理解を得んとする人々の要求に應へるところがあらば、かかる學會の創立もその意義の甚だ大なるものあるべきを思ひ、その將來の爲衷心の祝意を表するものである。左に創刊號の内容を紹介し

よう。

白砲術の傳來と日蘭の國交
隠れたる兵學者竹内秀明

蘭學者小關高彥傳

有馬 成南
佐藤 堅司
安部 正巳

史料——永祿八年築城記附解説

(東京市芝區二本榎西町三番地軍事史學會發行、會費年額三圓)
〔以上柴田〕

○現代支那概論

文學博士 矢野仁一 著

動く支那・動かざる支那

著者は本書の序文に於て、支那問題の複雑性は世界歴史の大勢と支那自身の歴史の傳統とが同時に支那に働きつゝある結果によるとされ、現代支那を理解するには變動的發展的時局的な事象と舊態依然たる本質的な部分との二面的考察が必要であると述べられて居る。かゝる見地に基き本書はその變動的、時局的なものに關する論究を蒐めて「動く支那」と題し、本質的な問題に就いては「動かざる支那」と名付けて居る。

先づ内容を見るに「動く支那」に於ては傳統的な道德的國家組織乃至國家觀が世界史の大勢に應じ或は應じきれずして崩壊しつゝある迹を尋ね、邊疆問題、北支問題等主として對外的な事件を取扱つて居る。著者に據ると蒙古西藏等は清朝即ち滿洲朝廷の領土ではあつたが支那の領土ではなく、此等の地方と支那との關係は滿洲皇帝を通じての同君聯合の關係に過ぎない。それ故清朝が滅

亡すれば、支那とこれ等の同君聯合も解消する。従つてこれらの地方は全然支那と關係なく、自らその運命を開拓し、去就を分別し得き自由の立場に立つわけであるとされ、(一)外蒙古問題に就いては蒙古革命政府の概況を説き、現今サウエート露西亞との關係が密接で其の一國に過ぎない様な有様であり、(二)内蒙古問題に就いては内蒙古の王侯は所有地を支那人に小作せしめる關係から、一般蒙古人と利害關係が背馳して居る故、對支問題に於ては外蒙古と異つた事情に在る點を論じ、(三)西藏問題に於ては西藏、支那、英國の關係を明かにし、(四)新疆問題に於ては回人、支那人及びサウエート露西亞の關係を説き、(五)雲南問題では雲南と英領ビルマとの邊界問題を論じて居る。更に此等邊疆問題を歴史的立場から、「歴史上より見たる蒙古問題」、「同じく西藏問題」、「同じく新疆」、「同じく雲南邊疆」等の題目の下に前項に於て云ひ足らぬ點を補ひ、蒙古西藏新疆等が清朝滅亡後、各々支那人の支配を離れて獨立行動を取つて居る過程を明かにし、蒙古、新疆に於ける諸部族の沿革やサウエート露西亞の勢力侵入を記し、西藏に於ける喇嘛教、西藏の境域、清朝及び以降の藏支關係から、更に一九一三—一四年に互るシムラ會議に至るまでの形勢を述べて居る。「歴史上より見たる雲南邊疆」はシアン族の歴史、特に清朝時代に於ける土司のことを説いたものである。

「支那の土匪」「支那の秘密結社教匪と會匪」「支那社會に於て最も特有な而も頗る厄介な匪賊、或は白蓮會、天地會などの秘密結社に就いて、その發生の事情、種類、性質、活動等を述べたもの

である。「北支那の問題と支那の本質問題」「北支那の自治とその發展性」「史上より見たる北支問題」は何れも北支那、黄河下流地方の内政、外交等の問題を取扱ひ、これを表面上からではなく、深く底流する諸因を尋討して、解明されんとし、支那人の國民性、歴史的傳統性、或は政治機構、歴史事實等諸種の觀點から論じて居る。その他、猶「西洋諸國の對支外交と支那の外交」及び「蒙古問題最近の變局」の二篇が收められ、何れも傾聽すべき所論を含んで居る。

次に「動かざる支那」は——政治に於ける德治主義、社會組織に於ける家族制度自治制度、平和愛好無抵抗主義の國民性等の——支那の本質的な部分に重點を置いて論じたものである。「支那社會の固定性」に於ては、支那社會は土と庶民との二つに區別され、土は知識階級であると同時に治者階級を構成し、庶民は無識階級で同時に被治者階級である。この兩者の間に不平の分子即ち匪徒の類が存する。これは事あれば蜂起し、世が治まれば潛む。この三類が支那社會構成の要素である。支那の政治は土の遊戯とし或は職業とするところであるから、事實上人民の福祉休戚は顧られぬ。換言するならば支那の政府は租税を搾取するにとどまつて、人民の生命財産を保護しない。その結果庶民は政治に對して興味を持たない様になつてしまつた。一面支那人は平和を好む國民である。然るに騒亂が不斷に起るのは如何たる理由であらうか。それは支那人が自分だけ戦禍の影響を被らぬ様にこれ避けんとする結果である。戦争争亂が起つた際は成る可く損害を軽少ならしめ

んとして、反對もしなければ阻止もしない。目前の損害を避けんとして、利己的な無抵抗主義をとる爲、騒亂は容易に大きくなるのである。かくの如く治者と被治者の間に有機的な連係を缺く結果何時も騒亂が起るのであるが、社會内部政治組織の事情は固定して發展性が無い、即ち不安定な形に於て固定して居るのである。

「支那の歴史に於ける近代と古代」は支那史の時代區分の問題を扱つたものである。著者は支那に於て近代古代の時代區分が考へ得られるならば、先づ現代を理解する爲に直接必要な史實を有する時代が近代であり、それ以前は、古代であるとの持論から、西洋史風の古代中世近世の三區分法を排され、支那近代は支那が西歐諸勢力の影響によりて初まると考へて、清朝成立時代を以つてこれにあて、従つて宋代を以つて近世の出發點とする見解を極力反駁されたものである。猶、又「支那における外國人の治外法權」支那に於ける治外法權の起源と其の撤廢の問題」はいふまでもなく何れも支那の治外法權の問題を取扱つたもので、殊に前者は顧維鈞氏が、治外法權の初めて認められたのは一八四三年南京條約締結の結果に基づくとする見解を非として、南京條約以前に於てかゝる例證の多々あつたことを擧げて居る。但し、これ等の場合は一般的概念に於ける治外法權ではなかつた。即ち支那の場合には朝廷自らの便宜によるもの、換言するならば、徳治主義に基いて居る「律」の目的を達する手段として、これを認めることが便宜であると考へた故である。従つて若し不便であると認めた際には

何時も朝廷が勝手に停止し、或は廢止すべき性質のものであつたと力説して居る。

「支那の共和政治と帝政の遺産」支那の帝政時代と共和政治時代に於ては専らその帝政と共和政治とを比較論究したもので、帝政の理想は徳治主義の政治であるが、これは理想に止まつて實行されたことはない。然るに清朝滅亡後これを繼いだ共和政治はその理想すら存在しない。蓋し清朝の滅亡は歴朝の滅亡とは事情を異にした。天命が去つた爲滅亡したのではなく、天下は天子によりて支配されるべしといふ理想が減ひて事實上減つたのである。宣統帝の退位を待つまでもなく、義和拳匪の亂の結果六部の官制が變更されたがこれは清朝がすでにそれ以前滅亡して居た事實を示めすものである。然るに清朝にかはつた共和政府は民族主義とか政治主義とかいふ主義や理想によつて興つたものではない。

それ故名は共和政治であつても帝政時代の悪政は依然として繼承されたのである。従つて一般人民の福祉は少しも擁護されるやうにならない、共和時代の支那人の法律觀念、自責の觀念、領土の觀念、社會狀態に徴するも一つとして改善されたものはないのである。

「王道政治の理論と實現」冀東政府は宜しく王道政治實驗場たるべし」は前者に於て王道政治とは如何なるものであるかに就いて、政治主義、資本主義、個人主義、物質主義等々を基調とする西洋風政治に對し徳治主義、社會的平等平和主義、精神主義等々の特質のある點を擧げ、その美なるところと優れたる所以を説き、而して最後に王道政治の最大缺點を指適して居る。それは王道政

治が支那に於て古來考へられ、歴代帝政の理想であつたにも拘はらず、曾つて實行されたことがなかつたと云ふことであると言つて居る。後者は著者が王道政治實施に關する抱負を披瀝したもので、冀東政府政務長官殷汝耕氏に對し、王道政治の實際化、現代化を教へたものである。

猶この他、本書には「支那の眞の統一と日本の對支那外交」「支那内亂の慘禍と國民革命の成否」「三民主義と露西亞の支那援助」の三篇を收めて居る。

以上は本書の内容に關する概略的な紹介である。收むる所の諸論究のうち、若干のものは既に専門雜誌に掲載されたものを含んで居るが、主要にして、而も大部分は稿を新たに起したものである。複雑極まりない支那問題に直面したとき、その真相把握の困難さは、新聞による朝改暮變の報道に倣して何人も直ちに背き得る所である。著者はその蓋博なる知識と卓抜なる洞察とを以つてよく組上の問題を解明し、隨處に著者独自の見解を示して居る。又記述に際しては引用文の如きを比較的是はぶいて繙讀を容易ならしめて居る。

最後に一二注文を云ふならば「動く支那」に收められて居る匪賊や秘密結社に關するものは却つて「動かざる支那」に收め、後者に收めて居る「三民主義と露西亞の支那援助」その他一二篇のものは又逆に前者に收める方が宜しいとも考へられる。

「支那の歴史に於ける近代と古代」は若い一部の東洋史家の最も興味ある問題の二に觸れたものではあるが、博士の「近代支那史」

中「近代支那の概念」とか内藤博士の「概括的唐宋時代觀」「近代支那の文化生活」などの諸論文を讀んで居ないものには少しく理解し難い憾みがあるやうである。本書の性質としては今少しく親切な全般的記述が要求されてもよかつたやうに思ふ。

猶、支那の領土問題に就いては、滿洲蒙古西藏新疆等を以て、これ等が清朝即ち滿洲皇帝の領土であつたが、支那の領土ではないと説かれて居る、これは一面の卓見とは思はれるが、一步退いて考へる際には「支那の領土」なる概念が頗る曖昧である。このことは「支那の領土」なる概念に就いて一層明確な定義が與へられた後に於て再批判が必要のやうである。要之、清朝の領土であつたと云ふことに據つて、少くともその點だけから支那の領土には非らずと云ふ結論を導くのは、餘りにも複雑した問題であるやうである。(四六判二冊、定價各貳圓參拾錢、目黒書店發行)〔小野〕

○東洋文化史研究

文學博士 内藤虎次郎 著

故内藤博士の短篇的論考は屢に發刊された研幾小録・讀史叢錄・日本文化史研究等に收められて居るが、著作論文の目録を一見するならば、重要なものであつて而も猶未收のもの、多いことが知られる。中には特種な雜誌などに掲載された結果、容易に見難いものがあり、その點甚だ遺憾であつた。

今度單行書中未收の論文十七篇を選び「東洋文化史研究」と題して發刊されたことは、その渴望の一部を癒やすものとして時宜を得たこと、云はねばならぬ。

これ等諸篇はすでに新聞雜誌等に掲載したものであるから、改めてその内容を紹介する必要を認めないであらう。従つてこゝでは單に題目だけを掲げることとする。

「支那上古の社會狀態」「殷墟に就いて」「染織に關する文獻の研究」「北派の書論」「紙の話」「支那の通貨としての銀」「宋元板の話」「概括的唐宋時代觀」「近代支那の文化生活」「民族の文化と文明に就いて」「支那人の見たる支那の將來觀と其の批評」「支那に還れ」「東北亞細亞諸國の感生帝說」「女眞種族の同源傳説」「日本滿洲交通略說」「古の滿洲と今の滿洲」「昔の滿洲研究」。

これに依つて知られる如く、本書に收められたるものは支那滿洲に關係するもののみである。研究の對象としては政治、經濟、社會、民族、文化に及び時代からいふならば殷代から現代に互つて居る。又諸論文の執筆の時期をみるに明治四十年から昭和八年、即ち故博士の學究生活の初期から晩年に至るものを含んで居る。

本書の特色とするところを略言するならば、専門的題材を一般の人々に容易に理解せしむるようにならば、專門的題材を一般の容易はやゝもすると識見の凡庸を意味する相言葉として解されやすいが、本書は全くその反對で故博士の該博な學殖と卓拔な見識を示し、その學風を如實に窺ふことが出来るであらう。

偕て本書に收められた論文中、爾後の研究の結果若干擧ぐべきところが發見されるとしても、これらの研究の悉くはその當時に於ては全く前人未踏の分野を開拓したものであつて、單にこの點のみから考へても、現在は勿論今後と雖もその獨自の價値は高く

認められるべきものである。

猶本書の卷頭には羽田博士が序文を寄せられ、本文中には處々に圖版を挿入して理解を一層便ならしめて居る。(菊判、定價參圓弘文堂發行)(小野)

O Ferdinand Lot; Les Invasions germaniques,

Paris 1935

著者ロートは現パリ大學教授、中世研究では先づフランス學界を代表する人としてその定評はすでに國際的なものとなつてゐる。氏の研究は從來専ら中世初期の範圍に集中せられ、これまでに既に十餘篇を數へるその著述においても、十一世紀以後に關するものは殆んど見られない。同時にその學風も、獨創的見識に富むといふよりも寧ろフランス風の實證的堅實さにおいて特徴を認めらるべきである。したがつて同じく中世初期研究家としてもウィーンのドブシュのやうに學界の方向をリードしてゆくやうな獨創的迫力には乏しいけれども、概して穩健妥當であり時に常識論的低調さを伴ふことはあつても讀者に不安を感じしめることがない。而もその反面には學界の進歩や問題の推移に對して頗る敏感な神經を有ち、新學說に對しては常に率直に、時にはむしろ大膽に、それをとりいれてゆく進歩的長所をもつてゐる、その間の判斷は極めて明快且つ適切であり良心的である。この意味で氏はむしろ數年前に故人となつたイギリスのベリー(Berry)に近き型の學者と考へられ、その著述は現在の中世研究の水準を示して而も初學者を謬らしめないといふ良き意味での入門書となる性質をもつ